



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

国 家の品格』『祖国とは国語』などで著名な著者が35年前、ミシガン大学に研究員として招かれ、その後コロラド大学助教授として過ごした3年間を綴った若き日のエッセイである。良い本、面白い本は時代を超えて読み続けられるもので、2007年6月刷りの奥付をみると、なんと37刷となっている。

こ の本の面白さは3種類あると思う。1つは次々に登場する痛快な、そして時として驚天動地のエピソードだ。例えば当時大学ではやりはじめたストリーク（全裸で戸外を走り回る）の話だ。著者の居たコロラド大学の学生が氷点下の寒さの夜、他大学の作ったギネスブックの1,000人ストリークの記録を破るべく、1,500人の学生が報道陣のライトの中で丸裸で乱舞する。これを大勢の見物人が取り囲む。著者も見物人の1人だったのだが、アパートに帰ったあと急に自分もやりたかったのだと気づいて、たちまち丸裸になり夜の道路を走り出す。大学教授が夜の街を走っているのだ。そして著者はなんとも言えない開放感を味わう。だがそのとき……。

ま たはじめてアメリカに到着したとき、ラスベガスに立ち寄りカジノのルーレットで熱くなり有

り金をすってんてんにしてしまう。しかしそこは数学者。転んでもただでは起きず、ルーレット必勝法を統計理論的に考察する。

2 番目にこの本の面白いところは矢張りアメリカの学界事情、教育事情に関する記述である。いかにもアメリカらしく大学のポストをめぐるの、あの手この手のすさまじい争奪戦や、昨今の日本と同じように教育が先か研究が優先されるべきかが熱く議論されるのだ。

学 生による教員の授業評価は日本でも最近は珍しくなくなったが、30年前のアメリカでは当然行われていた。だが驚くのはその質問項目である。「効果的に教えたか」とか「教授は教える内容を熟知していたか」などは当たり前だが「この教授を他の教授たちと比較して評価せよ」という項目はいかにもアメリカ的にあからさまであるが、やるなら徹底的にやるというアメリカ人気質が見えて感心させられる。

著 者もコロンビア大学で授業を受け持つのだが、その最初の授業直前のうろたえ振りが面白い。

結果として大人気教師になるのだが、うろたえるほど予習をしっかりとやっていることがうかがえる。著者は授業で学生を引きつけるには、自信が絶対に必要だといっているが、自信は周到な予習から生み出されるものなのだろう。

大 学志願者については、日本は一流大学には一流の学生が入学するというのが通り相場になっているが、アメリカでは必ずしもそうではないと著者はいう。アメリカで一流大学といえばハーバードやプリンストンなどだが、それらはみな私立大学で授業料が減法高く、お金持ちの子弟しか行けない。だから州立大学にも一流の学生もいるのだ、などと高校の先生にも見逃すことのできない教育事情もいっぱい登場する。

3 番目のこの本の魅力は、冒頭から最後まで3年間著者が終始「日本」を背負っていることだ。日本人としてピエロのようにアメリカに対して強がり、その結果落ち込み、やがて理解し融和する。その過程で日本という国が分かり、日本人という自分が理解できてくる。この青春の徘徊の過程で、すでにあの『国家の品格』や『祖国とは国語』は書かれていたのではあるまいか。



◀『若き数学者のアメリカ』
藤原正彦著
新潮文庫
定価（本体514円＋税）